

離は240kmほどもあるが、丁度その中間には山口県の孤島、見島（みしま）がある。見島には異色のシーコンボ-古墳群があると聞く。古代史ブー

ムの波が急に身近に押し寄せて来た感じだが、これらはすべて筆者にとって自然の成り行きなのである。（1986年1月）

『女性と地理』

井内 昇

4月から男女雇用機会均等法が施行されることになった。一片の法律で永年の社会的不平等のひとつが解決されるとは思わないが、それへ向けての一步として評価したい。

男女間に差別（segregation）があってはならないが、性差（difference）の存在は否定できぬ事実で、それを認めることが必要な場合もあろう。女子大が必要かどうか性差を認めるかどうかの問題と関わっており、女子大に職を奉ずる身として無関心では居れない。最近の東大新聞（2月4日号）が「何故女子だけの大学が必要か？」という小特集を載せたので、大枚130円也を投じて読んでみたが、教えられることは何もなかった。

看護婦さんは看護夫より病人にとって望ましいと思うし、プロ野球選手はやはり男の仕事である。家政学部が女子大にしか無いのもそれなりの理由がある。それでは、地理は男、女のどちらにより向いているのだろうか。欧米の大学地理学科では、女子学生の割合は20～50%で、この幅を社会環境によるものと考えれば、基本的には地理は男女の別なく学ぶ学科であろう。しかし、世間には「女には方向オンチが多いことからわかるように空間認識能力が欠ける」という俗説があることも事実である。

偶々昨年大学院ゼミで読んだ論文⁽¹⁾に、地理学習における男女差の有無をテーマとしたものがあってので簡単に紹介しよう。

この論文で、筆者は先ず心理学におけるこのテーマの研究にふれ、男が女よりも「空間的能力（spatial ability）にすぐれているとされているが、もしこれが正しければ人文地理学や地図学はこれまで重要な点を見落していたことになるし、もしそれが間違っているならそれを訂正する必要があることを述べ、5種の実験によって心理学の主張

が必ずしもすぐ地理にあてはまらないことを示している。

或る心理学研究⁽²⁾によると、女は男より言語能力が子供の時から勝れていること、男は数学や心象空間に関する仕事での能力が女より高いこと、この空間に関する能力は後天的なものであること、この空間に関する男の能力優位があらわれるのは思春期を過ぎてからであること、が明らかにされ、この限りでは思春期以前には空間的能力で男女間に差はみられない、としている。このMaccobyの他にも同じ傾向を指摘した心理学の研究は少なくない。しかし、著者は、これらの心理学における研究の結果はspatial abilityのうちの或る部分だけについて正しいといえることが見逃されていると指摘する。何よりも先ず問われなければならないのは、心理学者がいう空間的な仕事（spatial tasks）と地理学でいうそれとが同じかどうかであり、心理学者らが挙げるspatial abilityの7つの要素のうち、著者はMcGeeらを引用して「空間の心象化」と「空間的方向性、関係」の2要素が地理学におけるspatial abilityの要素として妥当であると指摘する。著者による5つの実験についてくわしく述べる紙数が無いが、児童から大学生、一般の成人をそれぞれ対象にした地図の利用に関する各種テストの結果からいえることは、年少の児童では男が女よりもspatial abilityで優位が認められること、大学生では地図利用の能力に関して男女間に差はみられなかったこと、これらから、今まで心理学者によって示されてきた空間的能力に関する男女差の存在についての説はそのまま地理の能力に適用することはできない、ということである。（終）

注：

(1) Gilmartin, P. P. 他（1984）“Comparing

ペルーのエル・ニーニョ現象

三上 岳彦

昨年の8月から約3ヶ月間、文部省科研費の海外調査で南米のペルーとエクアドルを訪れる機会を得た。団長は都立大学の野上さんで、南米調査のベテランである。団員はほかに5名おり、全部で7名から成っている。今回の調査の目的は、エル・ニーニョ現象の発現頻度が第四紀の氷期にはどうであったかを地質学的・地形学的証拠から推定し、さらに赤道アンデス地帯の気候変化を明らかにすることであった。

特に、1982年から83年にかけて起こったエル・ニーニョ現象は今世紀最大の規模で、ペルー北部やエクアドルの沿岸地域では観測史上例を見ない大雨が降った。この時の大雨の痕跡は3年たった現在でもペルー北部の各地に残されていた。トルヒーヨの北部にあるチャンチャンの遺跡はプレインカの広大な古都であるが、泥でできた城壁の一部が83年の大雨で崩れてテラス状になっていた。また、ペルー北部のパナアメリカン・ハイウェイも随所で切断されており、未だに復旧されていない。

ペルー北部の海岸地帯は砂漠であるため、普段はほとんど雨が降らないのだが、83年は4月・5月を中心に平年の10倍以上の大雨が降り続いたのである。このため、簡易舗装しかされていない国道が寸断された上、ピウラ、タララ周辺は有史以来の人洪水に見舞われた。付近の住民の話では、雨は82年12月22日から降り始めて翌年の6月まで連日降り続き、雷を伴うこともしばしばであったという。砂漠は緑で覆われ、スイカやメロンもとれたが、高温多湿な気候は伝染病をもたらす役割も演じたようである。

今回の調査では、こうした大雨をもたらした気候学的要因を究明するため、ペルー各地の気象観

測データを収集することも主要な目的の一つであった。実際に現地の気象観測施設を見せてもらったが、普段は雨がほとんど降らないために、雨量計の底には砂が溜っていたり、容器が破損していたりするものも見られた。観測データも一部は磁気テープに入力されているが、大部分はそのまま保存されているといった状態で、日本や欧米に較べるとかなり遅れている。それでも、日本の気象庁にあたる SENAMHI では、国連の援助を得て観測データの磁気テープ化を進めており、近い将来、日本から直接データを取り寄せることも可能になると思われる。

ところで、エル・ニーニョ現象は数年に一度、南米ペルー沖の海水温が異常に高くなる事で知られているが、その原因はまだ完全に解明されていない。なんらかの引金働いて南太平洋の高気圧が衰退し、貿易風の弱まりにともなって西太平洋に集積していた海水が東太平洋に内部ケルビン波として伝播すると、大陸棚の発達しているペルー沿岸部では冷たい深海水の湧昇が起りにくくなり、表面海水温が異常に高くなると考えられている。面白いことに、大規模なエル・ニーニョが発現する年には、西太平洋のオーストラリアやインドネシアでは降水量が減少して干ばつになりやすい。いわば、太平洋の西と東で気圧がシーソー現象を起こしているわけで、気象学用語では“南の振動”と称されるものである。

日本でもエル・ニーニョの年には、梅雨明けが遅れたり、台風の襲来が減ったりする現象が認められている。太平洋をはさんで反対側に位置する日本とペルーの気候が、エル・ニーニョ現象を通して密接に結びついているというのは非常に興味深いことである。